矢田貝家住宅　所有者からのコメント

平成２３年３月　１１日

関　係　各　位

矢 田 貝　淑 朗

「矢田貝家住宅」の文化財登録にあたって

この度の文化審議会において、「矢田貝家住宅」主屋など８棟を文化財に登録する旨の答申がなされることとなりました。なつかしい思い出の数々が詰め込まれた家が、国の文化財として認められることになりましたことは、大変うれしく名誉なことと存じております。

大正１５年に長男として生まれた私は、中学卒業までの少年時代を、大勢の弟妹とともにこの家で過ごしました。当時の家業は地主であり、出入りの職人や農家の方々などが日々訪れていましたし、一般家庭ではまだ珍しかった電話も引かれ、近隣の方々が度々借りに来られるなど、人の出入りの多いにぎやかな家だった印象があります。正月には百人一首に興じ、茶室では家族を集めた新年の茶会が行われておりました。夏には縁側から庭を飛び交う数多の蛍を眺め、日野川の河鹿蛙（カジカガエル）の鳴き声を聴きながら蚊帳の中で寝たものです。白化粧した表庭の雪景色も、それは美しく格別なものでした。

そんな数々の思い出のうち特に印象深いのは、私の生後間もない昭和初めころから１０年間以上にわたって行われた、邸内の大整備の時のことです。骨董が趣味であり、若いころからなかなかの風流人であった父・顯造（けんぞう）は、邸内を再整備すべく、庭園の拡張や茶室群の新築など、大がかりな工事に着手しました。今回文化財登録される８棟のうち、主屋・土蔵・長屋門は幕末から明治ころのものと伝え聞いておりますが、これ以外の５棟はこの大整備期に相次いで建てられたものです。

そのころの家の様子といえば、京都から呼び寄せた大工・庭師などの職人が大勢泊まり込みでやってきて、大きくなってゆく庭に石・木々・燈籠などが次々と運ばれ、池や清流も新たに造られるなど、毎日のようにどこかの光景が移り変わっていきました。まさに「日替わり」のような変化に、子供心にも心躍りました。うれしそうに職人に指示を出す父の姿がつい昨日のように思い出されます。当時は、水車小屋・炭小屋・米蔵をはじめ、現在は失われた多くの建物も邸内に林立しており、長い築地塀に四方を囲まれた我が家はさながら「一大要塞」の観となりました。

しかしその後、日本のどこの地主もそうであったように、戦後の農地改革によって土地の大部分を失い、一転して家計が苦しくなると、父は広い邸内の維持に大変苦労するようになりました。大学生になった私が東京から帰省した折、父から「今後の維持は一体どうしたらよいか」と相談されたことを憶えています。経済的な環境が激変したことへの複雑な思いも反映してか、父の我が家に対する愛着は執念とも言えるほど強かったのですが、私はサラリーマンとして実家を離れたため、やむなく家の維持は専ら両親に任せざるを得ませんでした。

その後、父は４０年近い期間、必死に家の維持管理に努めておりましたが、今から考えれば、その内実は家屋を取り壊す経済的な余裕すらなく、古い家に住み続けざるを得なかったということもあったのでしょう。周辺の古い家々が次々と姿を消すなか、我が家が比較的旧状を残しているのは、皮肉にもそのような理由からであり、それが今日の文化財登録に幸いしたともいえます。

しかしそれでも、病身の父が私どもの元へ上京した昭和末年ころから家は無人となり、以後老朽化がさらに進行し、父の死後いくつかの建物をやむなく解体せざるを得なくなりました。私も関東の在住であり、家族の力のみで邸内維持をしていくことはもはや限界に近づいていました。しかし父の家に対する強い思いを知っているだけに、全てを無慈悲に解体するという決断もできず、応急処置による「延命策」しかできない日々が続きました。今思えばこの時期が、矢田貝家住宅の保存にとって最大の危機だったといえるでしょう。

そのような板挟みの状況下の平成１２年に、幸運にも地元の有志の方々から、当家を地域の文化交流の場として広く活用したいというご提案をいただきました。このまま我が家を放置して朽ちさせてしまうよりは、皆様のご期待に応え、多少なりとも地域に貢献するほうがよいのではないかと考え、お受けすることにいたしました。それが転機となり、平成１３年以降皆様に邸内を広く開放することとなり、現在に至っております。

今回、矢田貝家住宅が登録有形文化財となりますことは、今後の保存にも公的な使命が加わり、一定の責任を負うことになります。しかし文化財民家の大きな役割は、ただ保存されることだけにとどまらず、活用されながら人々の心に感動を残すことではないかと思っております。多くの皆さまに、まず興味を持って足を運んでいただき、文化財の持つ素晴らしさをぜひ体感していただければと思います。

失われつつある「人が集う場」としての「家」を後世に伝えていくために、皆さまには末永く、また幅広く我が家を活用していただければ何よりと存じます。そして、伯耆町や鳥取県をはじめ、地域の観光振興や文化の発展、教育活動に少しでも我が家が寄与できるならば幸甚でございます。そのために、文化財所有者としてできる限りの維持管理に努める所存です。

最後に、鳥取県教育員会・伯耆町教育委員会・米子工業高等専門学校の皆さまをはじめ、今回の文化財登録作業にかかわられた多くの方々、そして古今を問わず当住宅の保存に尽力されました幾世代・幾人もの方々に深く感謝を申し上げ、挨拶といたします。

以　上